詩集『戦争』

梶井基次郎

青空文庫

私は北川冬彦のやうに鬱然とした意志を藏してゐる藝術家を私の周圍に見たことがない。それは彼の詩人的 career を貫いてゐる。

それはまた彼の詩の嚴然とした形式を規定してゐる。

人々は「意志」の北川冬彦を理解しなければならない。この鍵がなくては遂に彼を理解することは出來ないであらう。

彼は「短詩運動」「新散文詩運動」を勝利にまで戰ひ通して來た。終始一貫して。新しい詩壇は今やその面目を一新してゐる。韻文は破壞された。韻文的なもの——古臭い情緒——は姿を消して、新しいエスプリが隨所に起つた。「表現の單純化」「效果の構成」は古い詩人達の詩型にまで及んでゐる。嘗てはわれわれに親しかつた古い歌ひ振りの詩を今日に於いて省みるならば、われわれはそれがもう全く讀めないものになつてゐるのに驚く。「口説き」は五月繩く、讀んでしまつて何等のヴイジョンがなかつたことに氣付く。時代は明らかに一新したのである。

北川冬彦は終始この運動の尖端に立つて戰つてゐた。身をもつて。彼ははじめから他の人々のやうに一枚の古い衣裳も纏つてはゐなかつた。カモフラージユなしで戰つたのである。最も新しい、「詩とは思へないもの」で身を曝したのである。その彼の威力ある屹立は、だからいつも人々のブツブツいふ聲でその脚もとを洗はれてゐた。また彼はいつも最も簡單な言葉で彼

の教理を説いてゐた。同じことを繰返し繰返しして云つてゐた。これは自ら恃むことに厚く最も勇敢な人々のみの爲し得ることである。——かくの如く彼は戰つて來た。身をもつて。鐵のやうな意志をもつて。

彼の詩の嚴然とした詩型が彼の「意志」によつて規定されてゐるといふことについては、數多の論證を必要とするやうである。また少しの論證をも必要としないやうである。私は單にこの獨斷を掲げるにとどめて、次に「戰爭」の批評に移る。批評とは云ふものの私は小説家であつて自分の思つたことを最も平凡に披瀝するに過ぎない。

「戰爭」は三つの部分に分れてゐる。——戰爭。光について。檢温器と花その他。この最後の部分は彼の第二詩集「檢温器と花」から再録されたもので、私はまづこれに數言を費した後、第三詩集の第三詩集たる部分へは入つてゆくことにしようと思ふ。

北川冬彦は嘗て最も潔癖に日本産の文學をうけつけなかつた詩人である。彼の愛したのはフランス、それもダダ以後の人々であつた。その代りその愛しやうは全く一通りのものではなかつた。私は屢々不思議な氣持に打たれたことがある。それは彼がそれらの人々に對する先輩としての尊敬や僚友としての友情を、まるでそれらの人々がみな東京に住んでゐるかのやうな「間近さ」で表現するからであつた。アポリネエル、ジヤコブ、コクトオ、ブルトン、エリュアル、——それからマチス、ピカソ、シヤガル、アルキペンコ等々の畫家についてもそれは同樣なのであつた。「檢温器と花」はなによりもこれらの人々との親和をよくあらはしてゐる。

彼は「檢温器と花」の後記に、ジヤン・コクトオの所謂「對象を消化して、次第にその主宰する獨自の世界へ連れていくやうな詩」を意圖したと云つてゐる。それは作品の全般について云はれたのではないが、たしかにそれらの作品はこの詩集の精髄をなすものである。私はその典型的なものとして「椿」「馬」「爬蟲類」「秋」などを擧げたい。

「椿」は Statics の領域内にあつたものを、彼がはじめて Dynamics のなかへ持ち込んだのである。

馬

軍港を内臓してゐる

北川冬彦のこのやうな詩になつて來ると、軍港といふ二字が既にもう軍港のヴイジョンを伴ふのである。そして「内臓してゐる」で、昔の人が南蠻渡來の人體解剖圖を信じた奇怪さで、馬がそれを「内臓してゐる」眞實を信じさせられてしまふのである。この最も短い詩は最も強い暗示力を示してゐる。そしてもう一つ注意さるべきことは、この詩の構圖が「物質の不可侵性」を無視することによつて成り立つてゐるといふことである。このことは屢々 cubism の畫家の motive になつてゐる。私はこの affinity についてもう暫く語り度い。

彼の第一詩集「三半規管喪失」のなかに次のやうな詩がある。

瞰下景

ビルデイングのてつぺんから見下すと
電車　自動車　人間がうごめいてゐる
目玉が地べたへひつつきさうだ

高いところから下を見たときの感じがこんなにも生々と表現されたことはないであらう。この生々しさは何によるか。それは「目玉が地べたへひつつく」といふ空間を無視した表現法のためである。これによつて彼は知覺、若しくは感覺の速度を表現し得たのである。私はここに後來「馬」等々に達した端緒の一つがあると思ふ。それは空想と云はんよりは實感であり、實感であるよりは實感をあらはすための手段であり、——そしてそれは最後の段階に達して、手段そのものから嘗て一度も人間の頭腦に存在しなかつたやうな「實感」を呼び起す作品を形成する。「對象を主宰して獨自の世界へ連れてゆく」やうな詩とは畢竟この段階のものを指すに外ならない。北川冬彦の「馬」は cubist を聯想せしめる。しかし決して「故なくして」ではないのである。

その他彼は多くの cubist 達を聯想せしめる作品を「檢温器と花」のなかに書いてゐる。例へば「水兵」「女と雲」の明るい風景。「薄暮」「壁」の陰氣な風景。そしてここに示された彼の手法は實に完璧である。

北川冬彦にも嘗て器物愛好があつた。それは何を。檢温器をである。では彼は病氣ででもあつたのか。否。「樂園」「落日」——この抒情的な靜けさのなかで、彼はそれを愛することをおぼえた。

「花の中の花」「檢温器と花」といふ詩集の名は「樂園」や「落日」のなかの檢温器、それからこの詩などから得て來たものではなからうか。この作品は小説に於ける横光利一を聯想せしめる。北川冬彦はこの詩を愛してゐるにちがひない。

紙數がない。次へはひらねばならぬ。

「戰爭」及「光について」。即ち「檢温器と花」以後三年間の勞作である。

私は彼のこの三年間を深い感慨なしには回想することが出來ない。彼は生き死にの苦しみを經て生きて來た。

「絶望の歌」。これこそはモニユメントである。この一種人に迫る鬼氣を持つた作品は彼の陷つた絶望の深さを示してゐる。恐らくこれほど彼の愛し且つ憎む作品はないであらう。しかし彼は死なずに生きて來た。骨を刻むやうに詩を作りながら。

「絶望の歌」や「肉親の章」は第二詩集以後彼の示した一つの轉向であつた。人は彼の詩が

「小説のやうになつた」と云つた。彼はこの形式に彼の恐ろしい苦悶を盛りはじめたのである。「腕」（26頁）の白癡のやうな笑ひ。無題（18頁）及び無題（27頁）の夢魘。人はこれらの詩のなかにも彼の苦悶を讀まねばならぬ。さるにしてもこの「腕」の大膽な手法は全く驚嘆に値する。

これらの作品及び「機械」「空腹について」などは第二詩集以後の彼の詩の主流をなすものである。それは次に「光について」の難解な一群の詩へはひつてゆく。私はそれへはひる前にこれらの間に介在してゐる傍流的なものを調査し整理してゆかねばならぬ。

「萎びた筒」「剃刀」などは「三半規管喪失」的なものである。前者のキタナさ、「剃刀」の癇癖的痛覺。共に彼の第一詩集から生き殘つたものである。私はいまもこのキタナさを愛してゐる。

「ラッシュ・アワア」も「風景」も「檢温器と花」的なものである。

「菱形の脚」「砂埃」「花」の三つの「支那風景」は「光について」などと竝行して書かれたものである。おそらく休息的な愉しさが彼をとらへたのであらう。人をして微笑ましめる。秀れた作品である。菱形の脚の間に見えてゐる風景、女の姿をかくしてしまふ砂埃、心憎いことである。

さて私は「光について」へはひらう。

彼はこれらの詩に於いて「絶望の歌」以後の更に深い精神的苦悶の時期を經てゐる。彼の詩

は難解になつた。このことは一つの極點を暗示してゐる。即ち彼が自己の主觀のなかに苦しむことの、これが最後の姿なのである。さう私は考へる。

「光について」のなかにはわれわれにとつて噛み割り難い數多の Symbol と Metaphor がある。その間に、傷ついた魚が深く水中に沒して、ときどきその苦しんでゐる身の在所をキラ・キラ、と光らすやうに、生命、死、光明の Symbol が閃めく。

「皮膚の經營」「戀愛の結果」「灰」は暫時私には不可解である。

「光について」の六齣の詩も僅かにその片鱗が理解出來るにとどまる。

壁のうへの蟻の凍死、焔のつらら。

この一行の詩は私をしてボオドレエルの「秋の歌」の一節を思ひ出さしめる。

冬のすべては私の身内に迫つて來る。——それは、苦痛、憎惡、戰慄、強ひられた苦役や恐怖。

そして極地のうへのかの北方の太陽のやうに、

私の心臟は直ぐにも一箇の石となつてしまふであらう、凍結し灼然せる。

勿論彼の念頭にこの詩はなかつたのである。私はその契合に驚く。しかもこの詩は最後の凝結を示してゐる。

「花」「人間」「光について」（50頁）の三つの詩も解し難い。そして私はこれらの謎のやうな詩を總括して再びさきの獨斷を繰り返す。即ちこの難解な形式は彼の主觀の究極の表現である。この究極の表現はまた最後の表現である。即ち彼は自己の主觀のなかに苦しむことをこれらの詩をもつて終りとするであらうと。

「戰爭」「大軍叱咤」「壞滅の鐵道」「鯨」「腕」「腕」などは明らかに彼の目の前に展けた新しい視野を示してゐる。それは階級である。彼は自己を苦しめるものの正體に突き當つた。それを認識しはじめた。そしてこれは詩集「戰爭」のもつ最も大いなる意義である。私は彼の「意志」がこの道をどのやうに今後進んでゆくかを見守らう。それはわれわれの最も深い關心であらねばならぬ。

眼の中には劍を藏つてゐなければならぬ。
背の上の針鼠には堪へてゐなければならぬ。
太陽には不斷の槍を投げてゐなければならぬ。
（「腕」より）

然り！　病床のなかに詩集「戰爭」をうけとつて私の感動は激しい。

（昭和四年十二月）

青空文庫情報

底本：「梶井基次郎全集第一巻」筑摩書房
　　1999（平成11）年11月10日初版第1刷発行
初出：「文學　第三号」第一書房
　　1929（昭和4）年12月1日発行
入力：高柳典子
校正：土屋隆
2006年11月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

詩集『戦争』

梶井基次郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/